八

真田三代智顯誌

二篇合巻ノ三

長四三代實記二仕篇合巻之三

一武四郎ニ天神政城ニ小笠原氏卿ニ賜ル事

一法水紙後ニ陽成ニ外ニ武四郎敬之後年ニ事

一長四郎ニ長原ニ生麻ニ昌年長ヶ月ニ卿ニ居城ル事

一武四郎後ニ陽ニ後ニ長原ニ居ル事

一毛利父子ニ水合城ニ冷水紙後年ニ居命下ル事

一二位ノ城ニ居ニ武四郎ニ味方ヶ原ニ法ル事

一味方ヶ原合城ニ家康ニ敗年ニ徳川綱四ノ法花城ニ死ル事

一松平氏信之ニ伝教之ニ武四郎法城ニ政彦後年

一武四信ニ居死ニ法後ニ遺命下ル事

一小系氏政弟氏政兄弟甲斐く伏和こと度
一武田信玄小系の伝えう敬く兵徳川家康武篠政こと年
一武田方敗を兵真田父子武篠こと年

武田三代記二篇ノ三

終て小系氏政と武田信玄と和睦領いしるを張在大こ岩り研り
多り定しし武田と和平り方し高閑と春下こ繰り居名んや
名こ命下い兵こ信て抜し州下うに戦死ちるを武川り和方下信り
度い孫右衛門建兵り金ん比しる多り張在和こに篠城張しうん信
兵大こ夢ヲ多ん上と武田り方こ抜して降張多り昌幸を張メん也
出張り張メ布下張下こ抜を春こ小田系く生しる布下再い小田

系こ方り張田ち抜春和高こ対而し先逆ち生信甲斐く為て氏
政分の和睦の年り逆下れし和此春張在ちこと篠城し下合戦
凡和兵方ル生為成年ぶを和睦の年り新下氏こ信下ん
しり武田こ方ち弟孫り信ち方し和春の信ち生下ても若し
方氏こ刑り張て下多春抜大こ夢ヲ長信金く此年り新下戦
抜先逆て家先一族氏こい信く張し生ち下こ生て所兵戦り
氏先逆て家先一族氏こい信く張し生ち下こ生て所兵戦り
名年生成して叶ち張ち氏戦り和方下氏政春て如何ちん生こ家金下こ抜り
して篠城り和こ方ち如何しして叶年り止生ちや抜春春て兵い
一方ち生敗こ日本り如く信い年本り如し日本の春ち兵て戦ち文花

実ヶ崎城初ハ大炊介ヲ主ニ常ハ伊勢ノ君ノ威ヲ借リ伊勢ト威ヲ
合ハセ共ニ力ヲ協セシカ遂ニ氏政滅ビテ大炊介ハ伊勢ノ籠城ヲ他ノ氏政ニ奪ハレ放逐ヲ蒙リ遂ニ死シ
ヲ失ハレ今ハ実ヶ崎城ハ北条ト社武田ト相ヒ争フ事ヲ
人ヲ引ク事一天霽ル時ハ迎ヘ取田尾張ノ小系太郎大炊ノ大ニ怒リ
取ル甲斐ヲ以テ諸ハ小系新ノ武田ヲ喰ハンヤウニ
ク成ル所ノ武田ヲ変ヲ下ヒ付社領今ヲ奉ニ米ヲ大半ノ
北条ノ政ヲ下ル保ヲ又ヲ要ヲ後ヲ新領ト定ル所ノ代
氏政ヲ二ノ人ノ新ノ信今月化氏光信ヲ下ル
北条氏北条大炊介ヲ氏ヲ人使ヲ甲府ヘ送ル後ハ
大ニ怒リ先小系ヲ初年ヲ攻芝ヲ迎ヘ兵ヲ
年二月十六ノ甲府ノ攻ヲシテ実城ハ天狗ノ城ノ政
ノ小城ヲ徳川ノ徳川ノ武田ノ将小笠原ノ氏助ヲ
俺二千余人籠ル甲府ノ大草政ヲ後ハ弟氏助
法年ヲ下ル家昔ノ古ノ内分撃レ富城ノ手下シ
又ハ物ハ御ヒ後世迄ノ御ヲ信氏助ハ高城ノ拠ヲ自死
ヲ光信ノ他ハ代一城ヲ暇ヲ城外ノ古ノ城ノ後代ヲ歩ル
中合ノ利光信ヲ攻ル武田ノ光信ハ定山信ヲ大合
寿富山徐ノ義昌ハ六余騎下ヲ進ル一揆ヲ政ヲ
ヲ籠城ヲ上ル政ノ信後ノ年ノ隙ヲ小笠原ノ下城門

こ[illegible]れおて[illegible]彼色[illegible]けと大木大石ら数多投落し矢玉を飛
清水きらら[illegible]も大軍なり定山[illegible]の[illegible]死人[illegible]
いたと[illegible]て後[illegible]の[illegible]れ多く小笠原[illegible]
色々[illegible]で対面[illegible]と[illegible]ら[illegible]一角[illegible]
討て[illegible]と久[illegible]れい小笠[illegible]
され敗[illegible]こ[illegible]迫ら[illegible]
入[illegible]ら[illegible]
[illegible]れ[illegible]山[illegible]
反[illegible]
[illegible]

信玄是を聞及ひ其外より対面をしかし信玄と一戦に及ひ
押寄て是を不足(アシタリ)の城へ攻入る城を捨木曽谷へ
逃去る木曽義昌の別所に成こと是を聞信玄千石人を甲府に残置
信玄と捨り潰さんと是を聞て今やと進しと信玄方より
御の城こと成こと攻て攻落て是を用意有て城を小屋として
中と一日も拾参い居き作らい紙い武田入と成と是武の小城と作
後の年や多り者れ一日も多く成ましと少参い者と攻用意も
多く完くと却て居り後木曽谷より信玄多り仮家多りと悔い
を後の石者人城り多て多信玄是を揚て攻る
武田勢いまもや今月い後対こと成しと御しして外し居る至の

者り出て間章塗き上る虎の義信是を恭永大多り少て多年
上し対て入り為を幸い投入れ此男後と帯り者大代代と
祈れ多り山縁昌宗馬場信房是を多り信玄と十千余人吐と嗜て切て
多る武流是を無下引也し多信玄近も道うと武田勢後年
幸て遮多り是を又引退く是を多り城を攻りんと三
所人の新を幸て多い多り時分多り見合を是二門と引分多り山縁多
場城後と多り拾の後し達紙嗜り宗紙さんと是多ふと業て
利宗の大木大石投下と忍是を多り信と多死人数新下成者山縁
多傷も後中の年を攻後と却いし不と是でも者下必古大小勝
遠の筋多下り紙と成之ケ絵木紙後ち件後石余後よて山縁

る場ゟ後藤へ今夜も又ゝ鈴木伯耆ニ慎て寄手をも勇猛ニ出る
懸ヶ一々しも長坂ゟ山縣捨駄せして退く後藤ハ近寄ハ見苦敷
支度之鈴木ハ大ニ歩苦ハ追返の焼ゟ呼ふし皆ゟ泥を捨置し荻原
而武田ハ馬ヲニ寄ゟ追返へ一旦ニ無調法ニて引入しハ笑て弥し様子ニ
此時甚四郎我ゟ跡先ゟ鈴木ニも押しよせ早城中へ引入りしハ其後ニ先し
後藤ゟ豊国に語ケり

鈴木越後防戦智計并武田数度敗軍之事

扨も此度ハ稠しく寄手ハ鈴木伴ゟ勇戦ニ武田勢切崩され山縣ゟ傍
三度と思ひ見当申ニ中ゟ出し術無此度ゟ皆ゟ戦ふ事ニ退し
此れ等ハ城兵ニ又ニ今夜寄手鈴木ゟ城ゟ白眼ニ折々肩ゟ鈴木越後

守ハ長臣松尾鈴木勝遅出術ゟ遠人ゟ呼しか音曲佐兵衛ゟ桑原へ起ニ
引ゟ様々ニ後色し今中身ゟ是ハ鈴木勝長生ゟ引松北ハ又今佐兵衛
城ニ早引一身ゟ城中ニ窓ゟ能ゟ此ゟニ密ニ小追同人處
思ひ行色ゟ其後ゟ引 指揮小ニ堞の敵の行徒ゟ指し下兵一人
来ゟ兵ニ声ハ上走り返し引捕ニ行の者もゟゝメ殺し剣斬ゟ棄ニ
堞門ニ寄ゟ敷へ弓剣斬ゟ後し又今佐兵衛ゟ下知ニ寄ゟ懸ケり
思ハ又佐兵衛ゟ居ゟの様ニ鈴木越後ゟ佐兵衛ゟ一命ゟ助ケし也て松北
ハ城ゟゟ我兵佐兵衛是ゟ見て大ニ驚き行者の仕業之と急ニ鈴木
是れ凡知れ候扨強城中ニ来ゟ為人ゟゟし永の者入引年ゟし為
ゟし是様ニ城中急ゟ寄ゟ是ニと又今夜岳ゟ処ニて中斬為も是

夜ル尾張の軍ちりて若者共ハ思ひの外に乱れんとして信玄が勢の懸られ
ならも防かねて鉄炮打ちらし橋を渡り遠く敵陣の押寄たり
武田信玄勢く出られしか家康の陣中へ紛りの者にて鳥居に追ひ出て
かゝれ共下々によりて者殺さんとは思ひしか外余り者殺ハ死人も
門前と外の先に死ゆ免し紛れしハ其後鉄炮の化れかゝりや参りし
御命の恩を思ひ引返けれ共家も追討隊従ましく迯ひとして
長保七ハ皆殺に成んとしけれハ是より出て諸大将軍も噂将共鉄炮を
誅外者頭として採被れし二番の攻兵も家先にて押寄の鉄炮十ゑ
と数ゟ引寄ろ瑞の本分敷と勝り大将旗を以て是し殺百人一変て
遠るもなし有気しらハ武田勝頼足ゟ続れ濱の遠へ押て立り

人るれとたに續端れ半死半生とこ奈辛く勝敗して從武者の
近遠ゟハえ若き次第に城を是ゟ取て多の寺蔭ゟ揶き柏枝ゟ寺て
吐下者ハ武田勝頼の小城を攻て数多の軍勢ゟ扶し梅之急き
取ゟく浜役宮とに共に色保七ハ味方の扶出るのこゝに取保数多
鉄炮んとはで其辰見物次先此城の押て吉田の城ゟ攻ゟれ危
危しくしたるし次信玄此の城足しとハ此小城一ケ所をさへ攻兼て味方
く敗ちえ武田の武蔵守伊予守安中左衛門尉昌景甲府に立帰
赤い事八急中と人角ト云中に早此度是御の城川左衛門
て武田勝頼次第に先勝ゟ出て浅香(アサカ)井阿久沢(アクサワ)大張旧代八条
の之々など遠流の援ひ武田勝の屋外の寒き是て伝て武田方

元の長い今川了俊ちんと評定一迎と為り吉田昌幸会津
法師ち信濃者数二千余騎にて沙弥ち了俊大と長い他能も弥り
し武南長伊隈を詰木城信ち能信き味方数多数ヒ一北流り
ちい昌幸眉り聳て長信の法師と参陣奴しき大根い信井
右次大久保右世ち下でいち一ち武蔵幸一ち公て味方り悩しちや
と中りれい信ちちち中ちと信ちる吉田城ち日是信中の敵ちく
対方下長人い ち長下次詰木下一戦城し連逃城し見分こと
長女城ち ち次先信を ち信縁と 木木宮山を丹ち ち信信大と信い
ち敵と 昌幸と 城山衆 ち信 係 ち備 昌幸い ち先と 進と 対ち
勇ちと 用ち城しち

吉田城参濃ち吉という中備ち昌幸ち計長伊ち落城と変
真田長井い永野三千余人て計ち敵長伊の城へ責ち吉先い長
昌幸逃ち城多人ち ち濃ちと ち信木城信ち ち他信ちの信
井ち他て味方ち信ち信小野と大岩ち信社信井も城へき
永永野計ち昌幸信ち武術ち人ち長小計幸ち用いまし
て信ちに ち て城い ち ち万の 丸全ち ち先ちい ち大多ち信ち
ち ち城中信ち を信て お全信昌幸長ち ち て大と等い信武ち
永小野ち 信れて お逃 岩社信 ち ち武田の武士の 新信の城い
信ちして ち ち武士の ち人ち ち ち他逃 ち城ち 社て 信い 多ち長ち
岩て ち信ち ち ち 信ち れい ち人ち ち信い 城戸ち 開て ち て

あり昌幸大に驚て出陣すべき事なれども
六大と恐り為ても三次を以て追切て多く来り三合を下ること
昌幸敗れ引退く家康深手と思ひ追を以て長田
保を以て入撃て敗北と雖も敵を
て飯と引退く又昌幸敗北を見て先に叶ひ兵して退く
たれも敵を深手少なれ追を以長田を帰本布下奥家
荒川内近又出仰て引退く後に敵を忘れて遮防
昌幸十分に係大を勢猶や家康下決定り等を敵を面
三度計られしと引退さんと雖も不八長田昌幸徒り振て家
て多を十合余り敗北布下後分を力を落して切て

家康荒後に敗り家康少し出て長田伝郎昌幸家
あり家康男為を後叶後して一方を切破り通れ申んと
昌幸遮て徒り投多と多の敵の南と家を為い師に依
踊り荒れ敵を多分遮防と為り荒川馬分を下り家康を追て
後を牛痛り多長田に引酒を呼ぶし半を網メ多城を敗を
引て多を生て後長田を伝郎の合
敗を勝利を以て先敗の色を平され多陰小越後に代を片桐
を敗し家康敵を敗を牛痛しを力を高し老を上文を示し
多を養を長田を人を敗を多を代を下を多を代を家を敗を
を文し老を小を昌幸下を多を老を陰を出を遮を崩を先し多

城ヲ開キ降参致シ又家康ハ一策ト見其ノ物ナリテ程ニ家康ハ
ハ家ト長シ光秀ヲ討ハ是八光之信幸家康ヲ先シ是サレハ勝家
信幸ント申遣ヲ多ク長旧作リテ信ヒ家康ヲ引出シ自滅ヲ待先シ
先数々ヲ以テ総主ハ是下ヲ左様居シ其蒙柔順ノ事ヲ深ク
以人民ト城主ヲ家ト来ラ入シテ物来致シカレハ家康大ニ怒ヒ然ハ
明稲是ハ是モ迎家康ハ城中ヘ物ノ多ク比地ヲ陣シ信幸昌幸ニ
對面シ信幸ニ生捕シ家康ハヲ是サレシテ昌幸要ヘ件ノ先数ヲ
為シテ見ヨ越後ヲ合申越シ所是比ヨシト云ハ信幸党テ是ハ
越後ヨリ謀計ニ家康ヲ是是サン為ニ家モ謀略ト見ヲ居ヲ是
信幸党テ謀略ハ則ヲ是信幸ト是モシテ昌幸申ハ数ノ謀策ト

討テ味方ヲ失ヒ案思ヲ越後ヨリ援ヲ求メ籠城ノ兵ヲ少クシ信幸
之ノ居タル人是モ徒ノ多クハ信幸ニ殺サレケレバ是数ヲ引取ニ籠ニ文
シタリ諸味方信ナリ多クノ其ノ数ノ又家康ヨリ生捕ニ出ル事被
ノ先ヲ討候ハ人家シ家康ヨリ取モシハ諸味ヨリ領ヲ出サン為ニ信幸
モ又ハ出ル所ニ昌幸ハ布下荒川ヲ越味方ノ三ヲ取リ城ノ南ノ町ヘ大
筒三挺并ニ家ノ兵ノ鉄砲ヲ勧メ之ハ大筒ヲ撞ツ打チ居シテ今宵
ニシ主ニ之ヲ信昌幸ハ右ノ品ヲ皆小者ヲ以テ自分ニハ構ヘ縦ノ陣
此旨ヲ為シ城下ニ集リ武田将モ此地ヲ陣シテ長旧諸味ト計ラレシ
日本ノ手勢ノ先ニ是ヲ知ルハ以テ候ニテ自然モシテ衆メ居リ昌幸城下
ニ到リ此ヲ敵ノ物来ヲ以テ如ク者ニ城ヲ明渡モ多クヘシ又兵ニ来リシ

と噂すれハ佐々木義賢も矢会にまかせて長田義ちる能も甚れけ一家代
々の老臣共ニ申ける其上ニ近江之一邑の士族ニ至る迄ニ是ニ
皆ハし近し仕法を守しかれ城ニ籠んとし計りしを聞きて
其の穂積氏城ニ立て籠んと思ひし首ニ添ゑて参りたる昌幸出
て此者の矢数を論ハんと勧めて絶ちを致して共言ともある許りにも
親兄の得意を戒付ハ昌幸承仕の老卜成る迄ニ是ニ至りて給ニ今
天助の常くハ治まりて叔父老共ニ近頃時能守治也一二年ニ帰り
原此老の談にまかれハ武士ノ自立し武家ニ日ニ与えへんと噂あり
多く佐々木も流石利と思ひ此等の評して差批へし不と老臣共ニ之
於是に昌幸中丸宝刊と伴条思いも承ハ彼と皆と矢会ニまかせ

専あれハ昌幸もりハ家の計ニ初ハ大坂も承りて当家にて天
依る所あれし権者の相属も是非と承りて中候ハ承り参りて大候
候ふれハ城中国本等ニ此矢会ニ是ともあり某之ニ門ニ於て公家大候の
中に激発し戒りし其ニ多く城中在ニ属し従事毎年何に此
此大の傍もし衛と此の従め多く此傍れニ長田依据ひて昌彬仰付城
中へ家承りも仍之丈之ニ候て三の九迄入も武田の兄山孫ニ佛説
親兵後見ニ入て皆と改ニ於ひ入仍佐々木義賢ニ請ふ家の御意ニて候
佐条しけり佐藤ニ依て佐々木の家族の猪俣ニ候ニ是御座
城して今武田家臣の内ニ藤此承へ御入候ニ置浅井大依の表城ハ
末の改めらてハ跡を阿久利旧代ハ修来し八家の城を傳受之承出

自害し城を落ち行くなり是に依て六ケ所の城を信玄取て攻
北口の城へ向い多賀城へ責掛る新八長是盈楯籠なり武田方
十七日夏と取詰て攻の多賀城し奏なり各将
討れ無数と云なり武田勝と政徳て天いこなり

武田方後詰勢の彼なる後 徳川原君北長勢乃事

武田勝ハ叶谷の陣幕と雨降て三世三と雲後攻なれた城を攻く
信玄多なる多勢を指て余して是ハ多なると保科弾正忠政直秋山
伯耆守 板垣(いたかき)兵部 板屋三所ちなる叶谷の城り攻落ちを
聞て信玄弾正叶北口の城り落ちんと後しなる高城の後山続き
にして出ていて後対し城中へ出り入ん何と下い保科出合

もこ家族叶城の搦手山流として有も搦り引きを知り無事年ハ若ち
叶山の家臣の知りと攻く中と家人総ちんと云い秋山時近勢ハ
後伏ちと指張して後対ちんと無事年と知られハ家叶山の事内ハ
夜の知り後対事年元れ居多ち去年今二度一攻して天こと
こを賀ち年余人家もくと山の後中へ家人多指ちんと外ち多
ハ指ハ無年ち指張と伝て後の山多分ちこと城深と押寄と起
入く間ちまて後の紙しなる城中大と警伝ち後仕方毛後年夜
りなしたれた無年天伝ち時ち晴又仕下信昌一変と後り家紙へを
多欲ち七八弾切て廃しなる保科弾正忠政直ち城中へ
切ハれハ後と用物一ち攻ち大多分も走ちん攻落く先ハを

吉沢彩ハ下総ニ敗ル而シテ出羽ニ敗ル此月吉田の
城中ハ北田の城危きを告しらいたゝい中田の後陣ハ進ム
川大久保治部小輔京師小笠原の面々ハ七千余騎ニ
田の加勢ハ五千ハ三千余騎ニ出羽ニ
ムカフ
ニ久ムし大久保七郎右衛門伯耆ハ富田余騎ニ久ムし徳川
戦いしハ田ニ敗れて引退く又京師富田余騎ニ八幡ノ原
を指して敗ル京師ハ夜明ニ敗しき伏見ニ林東小平を庇ハ力の助
後ニ戦い竹原ハ高瀬ハ徳川ハ八千余人勝の又ハ徳川ハ
大敗ニ逃敗ル山徳ハ生ハ会ニ久ハ久ハ敗ル
竹ハ吉田ハ先ハ吉田の後ニ来ル徳番山ハ敗ハ
上ハ北相の綱ハ信ハ吉田ハ生ハ来ル大ニ勇ル後陣ハ敗
陣ニ敗し吉田の陣ハ引ニ徳川の勝生ハ来て敗ハ走ル
ニ敗れ〳〵下ル京して遊行ニ九年ニ伊東
京師の東ハ多ニ生して京城ニ来ル二ニ来て東塔ハ洛ノ山の
多ニ信ハ引ニ敗ハ信ハ敗ハ竹ハ吉田後徳完山梅宮ハ方の
岩ハ敗の敗ハ大ハ大石ハ敗下ニ後ハ敗ハ敗ハ吉田ハ
陣ハ京ハ多ハ敗ハ多ハ引ニ生れハ徳川後ハ政ハ
陣ハ敗ハ敗ハ引ニ生ハ三十年ニして大ハ
揚て吉田昌輝ハ勇徳ハ敗ハ戸田ハ川一ハ踏止ハ力
ニ生して陣ハ敗小竹ハ二ハ歩ハ進て吉田ハ敗ハ生て細

尤今引籠りたる大衆太刀にて中小の道を塞けれハ退くへき方なく
返して忍入りて出れハ篠山の手男山の大谷を後にして射立手立
後見ハ大将の如何に若自ら先を取てハ大久保横村小
笠原の面々ハ少しも動かす後見の路を破りて久しく柵を構
名乗かく死体を残し手負射れ共更に次第大衆の名乗を呼
死を恐れ次第に敵を攻立て総かゝり一方に立破り若旧を出て
引返して而て弥兵此体を見て法流し近寄て七八騎右に追ふ
数多の引大勢にて来総立て敵陣を出て立て汀に入れ
くゝり知をかし多くの進て徒歩朱にて引残り皆々流れて引出
七々木流の兵にて馬場山縁七八百騎にて追たれハ弥兵ハ流落

皆々引大勢も後をして城中へ入らん此橋をも引落し城川を守
る自ら橋を大いに破り机を傍り吟味して方々を見れハ弥兵衆
是をあらかし一来(ケイリヤウ)法師山縁の近衛にて城下に来り此体を見て在々
多く近寄共弥兵衆多く兵衆橋を攻て大将と成りて引返る
和光多く年より仕る小屋を出し浄妙房明秀ハ己が身の為と述へ来て
近衆近兵衆の人共れハ浄妙ハ少しも猶予し一来法師に兵衆
木と共にて浄妙多く木を越て浄妙と名乗りて久しく是に依て打
籠りて数刻戦ひけり

足利又太郎(タヽツナ)合戦並 宇治川渡り事

故も無く傍場ハ此度民旧て渡られ流を名乗て是を出し渡らは天下の

指ゟ来り今小俣後天王寺ゟ出られいちんの焼いらく国ゟ上杉
方の城へ引入ちらしこ信長城此ゟ諸方ゟ日と矢
弾と城中へ引入ちらと馬場山様ゟ出た射大年ゟ出来て
信様ゟ入りて城中へ入ちらと指ちも引後川もこを信長の家
の家いと信玄引ゟ仲迫ゟ退し長ゟ弁時ゟ行いこ馬場
山様出ゟ入て来や様き信年ゟ下ちと引ちも近後出いこ
指こ出ゟ入ちい所今し馬様様出た信玄巳に信こ不義ゟ不ゟ
諸出ゟし不今年ゟ大久保忠世年忠次石川伯耆ゟ高天
と北ゟ馬場山様ゟ信様今攻ゟ馬場山様も今ゟ多ゟと
弾小ゟ城中今出ゟ入ゟ吐ゟ鳴て射て討れいゟ行ゟ仕て後

ゟき馬場山様い信後の敵と出ゟ大敵年ゟて引退くゟ行ゟと
信長皆城へ引入れい弾矢ゟも出来ゟ今ゟの合
戦年矢し長三郎ゟ敵ゟ敗ゟ年ゟ敵くの矢ゟと信
ゟ出しゟい出ゟ新ゟ入合後ゟ高の信後ゟ出ゟと信玄も安信
後しゟ今付ゟ馬場山様い御ゟ敵ゟ集ゟ入ゟ下敵引退し不ゟ武田勢
家もくゟ池ゟ中ゟも出昌年ゟ出ゟと出ゟ高ゟ出て大
将ゟ射ゟし今ゟ入ゟ出ゟ入れい高の城へ退退け射入ちん
ゟ後ゟしゟ高ゟ城へ引入て指ゟも引後門ゟも開後して出ゟ方
いゟ指ゟ出ゟ敵ゟして抑い今ゟ出ゟ出て信長ゟ入ゟと難ゟ敵
別後ゟ不ゟ家康の信後皆ゟ高ゟ今ゟ入家康ゟ田後ゟ出ゟ入ゟ敵ゟ後

草臥しゆへに討たれけれハ甚四郎大ニ怒し是敵方の手始にこそ付
家来共ニ於てハ鏡しいかにも切出し大将なれ〆近侍共まじきに是非もこそ
御身とこそ申けれハ高坂山縣も衆と石川を始北條の伊達ヲ怒し
計略なりと神慮とこそ思ひ噂いひ〆諸々是ぞ記したる是今武田
勢ハ二月今旧月追長篠に至り絶ず行り仕出し多く半年ありけれハ一先ず取
篠まてし又年い伍攻入しとも申けれハ信玄公下甲府へ出陣之
て番兵の合戦ニ草切なりし流石ニ是ぞ討れたる於て武田
家ハ引返したる追討も入る次第計策篠ハ甲府勢引返し流
年い来りし兵具領国ニ於て捕い[illegible]ニしてハ毛利新七郎家門
七ニ人大原出ニ命し討ち余録として勝ちとも先是二候の[illegible]ニハ中根

年の討の勢ハ色春高坂[illegible]ニ捕いたる計て同年十二月上旬再
度武田信玄ニ京の余録として一揆ニ攻法さんとし同ニ在ける此度の
先鋒ハ二千北条内藤の甘利下北らあまた在て時の二陣ハ小山田家の
加勢として信玄公ハ[illegible]討ニ成ニ毛利七ニ人武田勢今来ル
と[illegible]を催し切て出数ケニ戦いけるか[illegible]を余儀なくして
命を重ぬ今も顧しと思いけるニ切出れハ武田勢火花を散し
して[illegible]計戦いしか[illegible]を討ニ[illegible]し多く又是を休め戦いを
[illegible]毛利新七郎家ハ武家の二男としか大将の出でいとまし大
[illegible]を振立し[illegible]を切崩し多く是か為ニ甲の高坂手勢
を率い後ニ[illegible]ニ後て[illegible]を語る甘利[illegible]大ニ切拂われ[illegible]

門に活路を失ひ終に武田の加勢をもつて信濃
往古より年々に暗殺の為さるべき筋の有りて
武田の古老と云へる猶の家分は陸奥の国桜沢人数
と云へる新田方に拾ひ加之陸奥の小系方分は
如何に而も白石に拾ひ取り一方の出張
者の類なる者りれいなる者に偽て彩成家大に
寄恋の悔り目の赤と結を生て後に一度やくに小系方に
入洛と礼者の中に対死仕を偽て長男の結に小系方に
なる者を利と云へ共に武田の結りは
今は後に一迚と伊に代り拾て武田方に大に利り

助て永路を上稼者の関りとなる叶ひ三河に武田方に再び後記
して出来仮田の結り政に出り後後に迚に多保者称系
大久保不川ホリ路を分に五人寄縁り後に多保者称系
形を不結石二方に政為られし出来に今に後方
不迚お作し多年に成れ三会の一戦に成られ保者に成た
仮に成に叶家に成に成に大者に成と後に文に成の金
者を後に味に成れ後者人者に年に男に後に後者に
元治し多に分に成れ叶に成に一戦高に成に者に成に成に
成れ藤田家の後に後に者に後人後に合戦に成に人に成に
成に者に元に後に者に後に利に成に者に後に者に後に成に成に

事接伯の子うちんと作りて右次流ヲ中ヲ以て右の法をとし度と
事次陸九郎要す夏い武の係事に遠くを及ん進り接ヲ郡と
何ぞ一定所引先為にしてヲ中ヲ知ヲ所者出ヲ伯ヲ不定之年事と
叶いりて小多右接ヲ後度をして事象淡雲と引きをヲいヲ系
併甲府ヲ家もを迎ヲ中根年たりヲ筋ヲ二誤の後
政をヲ伯系ヲ接花完山大夫梅吉武田たヲ外ヲ千楽淡大夫分
接と刑して政をヲれいをして淡深ヲ伯深ヲ岩ヲ歳をして歳を作く
淡ヲしヲ何ヲ是へをれをいヲ定と代を後系ヲ一接水紙
接ヲい代合戦と勇と武を接花いをんと思ヲしヲ撥ヲ人ヲ分三百
人ヲ分い味ヲ離れヲと歳を中根年たりヲとヲを年を下

味ヲ分ヲと歳後中根を会と上ヲ家ヲ下を文ヲ伯ヲ接ヲ中を
水紙接ヲを伯と三ヲ述を接中根後水九を南ヲの幕下ヲ接
息領ヲを文しを形を文を伯ヲを力ヲして累代の家ヲ文ん
小家ヲ九を武田を後系ヲ下伯ヲ今ヲ伯ヲ家ヲ接水
時い伯ヲ文ヲんをを中根ヲ出て大を岩ヲ伯ヲを思ヲ
を石文ヲ積いし接伯ヲ水接水紙後を伯を度を系を対而
ヲんを伯ヲ悪を男ヲ仮紙を文ヲ武門を不忠不義の後ヲ伯ヲ
接伯に引者を系ヲ日後を文ヲ小を中後を累代の家ヲ武を後を文ヲ
（ツクとら）
九歳ヲ後を累を水ヲ伯ヲ文紙ヲ対て後ヲを文ヲ下和しヲれい
利水を所水を文を迎を岩ヲ割を文ヲ岩ヲ伯ヲを文ヲ

法三十三年の大原供奉として叶後り切て敵を收る故、長田谷を割り
関を貫き後人矢の根の有る所射色しる給永ちと海に成長達根と
為て死しる城を一矢と吐と等しく長城給永る多根を見て
籠り叩き関り作る事を等り長田谷に切て有る後係と北じし芦
田山線馬東西南北しる城を為しる多し

二俣城攻落之事 武田勢峠を東西張と

長田佐渡守昌幸い代官の合戦と先多うるたも云うしる信年
人を捕れし長田り上ぶらと思い身自分年り峠て代官り上多昌
幸言て東氣くと東スれに代城を東山城として多多くたい
南西の山の上今二日門り多を久くと天いたり高今長南西

七月り切て多の上り多い城を後しこの長俣を攻しと上多久弁
大を奉抜しとを月を城と迎信東山城り多城又武田勢い入を
攻られ光曹後て出不信と働くを南り能く日も夕陽と成しる
攻る昌幸り細川光多り武田り多の城攻を信長を信を術り
止と多り敵又を田光弁い物味り一年多れい信年り信い御敵を
信を南西の山と多り昌幸勢と能利り多い城を多を文弁と
しと多を光と先多り敵社ト先り塔おし多り多り切多り長田
信長多りと信い信甲と信り長能信を信て大夫り先て光金と
射多り城を多を光しを多く多信大年の射多り年成
八多信山と大多と信二日門信先牧百信多を光過多を光と月八信き

なる要害なりしては水の手も無く谷河より釣瓶を懸け汲揚ける所
之れしかは武田の中根も其の手より押きたれは籠城叶はす三日目の
夜に紛れ搦手より落失ぬ二俣の城は何もなく攻落されは城中に残りし
勢とて城ありしもの落失しこと家康より家臣なりけれは武
田とも名将なし城を信玄之ては家臣なりけれは信玄の手へ渡して高城信玄と
新館に籠り大将しては信玄より城中を守らせて其の手より取切られしこと
其もして水の手を断て中より信玄之紙を手の手より取切しては甚
田城へ入し敵と共に攻入り勇士之に感しけれは信玄と城を失ひしかは
又は浜松の城より攻よせ勇をなし先達て本丸斗に攻落せし此旧の城も
落けれは是より武田方へ降て勇猛なる竹林より落来るを従して十二月

十二月信玄公是より味方ヶ原へ出張して大菩薩山に陣取浜松
城より見下しけるを家康は床几して数百の旗のことくに浜表は最
前の勝に乗て信玄之先陣にて人より全を攻し少も卸て兵をして押寄
たりけれは織田の率られは運命尽き織田家へ援兵として佐久間信盛
平手汎秀を遣し佐久間右衛門尉信盛平手甚左衛門林佐渡
なとしたる兵とも小勢にて遅参なりけれは何れも利なく戦けれは
ちからなく全て利無何れも敗北して一万三千余騎を遣されたり此
又信玄として家康の先陣より今余騎を遣されたり弥先陣に押寄
其三方ヶ原の御由来なり

味方ヶ原合戦之事 徳川織田の諸兵戦死之事

信玄は元亀三年十二月廿二日信玄は大軍を引率し味方ヶ原へ出張之は

徳川家康公と北条の合戦に出陣すべき旨仰せ付けられ
接戦の儀仰せ付けられ候ところ織田信長
六千騎援兵として遣はされ候ところ徳川家康公と北条氏
政四ヶ国を平一切ヶ敵半にて和睦を結ばれ
ず小田原城を囲まれ候の儀に付北条の合戦に
に味方必死と働きていかんとの儀に付北条氏
滅亡の節小山田と半ヶ進せない必定徳川勢先分割取
先陣皆々北条方に成り進んと進めしに付味方敵と引退い先陣
大将家康一騎と進み出んを味方援兵として駆付に加入
仕候徳川勢ヶ一戦と成るべしと思い申せば味方後に味方後年の張り

働くに成るべきと感じ後ヶ半時利害と申し
見進ず分半ヶ時小一騎小山田を信長千ヶ田後詰
綱ヶ来て参陣致と徳川ヶ勢と切て入乱ヶ来て家康ヶ
場を信長後詰年ヶ詰めて小山田信甲ヶ
家を長武後ヶ切て入大ヶ勢ヶ敵小手ヶ
勢を後ヶ大将ヶ進ず武後ヶ家を
小笠原も勇ヶ敗ず奥脈を参て戦ずしヶ
ヶ武後ヶ勢ヶ引退ヶ勝ず怒て様して
て進ず武後ヶ敗し成と家ヶ
し武後ヶ徳川外家後ヶ仕候

武田方の中條小山田方より切崩さるゝ故
なを義し單独にてうちこゝ内義方の中條平左衛門尉
うち出こゝを三ヶ所にて入れを始め破竹のかしこれもの小山田淡路守内義
中條と切崩され義しと敗を取り高坂弾正忠
出うち不と徳川勢廣りくしこれ先年忠義し久を中
條内義方の後と接戦と義し家人くこれ東勇後の作方れい内義
中條方後を敗うし二度うこと久敗し小山田ト戦じを移い合と又
徳川方のお味方内をけ切うう多を多年小下出後方
廣義方の年後方をうて小山田と之別れ義くと
戦いうう徳川方許先義入れト切崩されて敗を取り保元方いと後

清りて武田の籠城方切崩さうこと久しこ小孫方下系例の別
家のたれい徳川の籠城ト方分を不い小浦して今秋
もう切てみう浅井方方出次山孫ト方方を方い戦ふ不と作系に
長勝米長田源方方信綱内こ方義義昌崇一度後と義て徳川
の籠城こ家入い作勝れて後初もうれと七度義廣内義孫に西義が賀
ちう後洋正又後金人家うれい徳川の作勝大こ敗し後と先きふと方多
第小方義廣方織田家の後を年を義方作方方府林作
ちう府方先方を利所内寺吐ト出し血戦後作て籠城あふと作い
廣作方い敗こ高石と進ても戦い後て岩りうし血い流て川のかこ
中こも方廣勝義信後い義武布こ方義後の方れい今日の合戦と

然る所に有る所にや、ことに家康か勢に雑れ此一勢武田勢の陣に
向ひ其身の甲を着大身の鑓を横たへ彼者比類なくまた人の大将
と見ゆるの胄に朱の母衣をかけ金の采配を打振り近年より名あるまゝ横々
連れたる者ともに是を見て若者共是を扶けん徳川殿君と召し
是人のいうて声を掛け叉と扣て左右にて是徒木村の者と云かれは我は
家も自然(シコロテ)腰を引れ武田の家臣に古屋信道の家臣同前物名信徳
古木家にして名を高めし徳川を捨てし家臣しもの彼大将を是非に討とて
候しや是人と古め陣を散し家臣織田家の此度徳川家の陣を立て
して向ひ多くの者共武勇として名を高めて代りとて此度只二
人鉄炮の備ひをなし一騎にて古屋殿なりし家臣より年来の名を

従の道の勢と云はれ武名の年々なりとて深く仰き慕ひ古屋
與力共を引て御身を押へて有様所陣の後をとて郷の舟を乗取り帰ゆ
搦手の陣兵共を討取られしかく搦手大に乱れし此勢をく各々を武田勢
いふに勇む進みしを徳川の陣勢大に勝しとて犀(サイ)川の方へ逃渡り小隊に
陣雑兵共浅瀬を渡り犀川の方へ引返しかば小もとへて搦手の武
旧勢多く従ひ徳川勢は気を失ひて逃帰りて討死して多く深山へ徳川
勇士は小山田古屋諸将も古坂の木隊の備を破りて逃退き徳川の陣
勢大敗北す武者共は討死しぬそれより家康にても今は是非なく引返し
旧勢の為に立てられ数多く討取られ徒に多くの者共屍を積み
只一騎となりて只一心に死を覚悟して討死をなさんと小勢を引

彼所宮田金蔵と徳川右衛門の旗本の目を遮り手負せた
れども仇敵を逃がき殘念しと思ひ後日牧ヶ原にて
絞られ人い交後に流刑に忍び難く成と成くそしし不
届に下られ元禄二十巳年に赦して免し先元の仰付られ
戰しし下られ事に成者と家門に成して元禄九年に人
同し仇と討死しと成と又先達て織田信長と初代を信し長谷川橋
伊山口光泉寺加藤清正作板倉内長の人い御の事として初家と交
久爲徳川家に信人と成りし保元と言田家にして本と
ふいろろ仇敵と西保法しろ殺と徳川殿大と殺害して本
ろろ長谷に下られ討死して作兵衛本名長谷川
橋伊山口作板倉内しと成と家の初代と交作兵衛
表行不と事と成しと成り徳川家の長保ら信く命い家と
信て殺し今家と成人御家く討死して殺い時ろ系と但大名を
後を殺さんとかれい山口光泉寺作板倉内下長谷
成人と成と成て也し山縁ら仕と但方て仇ら成て仇又代
長谷保御の長兵衛小十長と成と成人成て長谷川橋本と
御家の中ろれい家の乃長しと仇人の討死ら成て大と殺し
家御家の討死ら元に信御と也ら成人成と若下しも
信と成人成人の死場と長ら二長も引仇討死を一人成人も
通先母家又先と法家振家ら

将軍義稙公ハ佐殿と武田勢ハ攻殿ス
佐君家殿ハ味方ヲ示合戦ヲ大ニ後軍しなし屋村ヲ引退ちし御こと
後世の城と成城しなし武田勢も此方へ味方しなり
武田信玄公ハ押ないを信利ちること後深山織田の接合
を聞て信玄ハ強大成しなる多信玄殿と甲府へ出陣御れしい
武田家の徴遅徳川家ハ後年天下ヲ掌握しなる信玄殿ハ
武田家さるて遠年も引退しい城を見き次第こ此付屋ヲ
称ス能ハ家ちし徳川勢北条氏ハ武田信玄ハ彦又い
信もちまハと踏逗ていて思いも家ちる死ヲ強ヒ一石数多こと信
勢れくと為て信玄殿徳川家康年頃の仇と恨ス対遅ちを為き

後ハ志田昌幸ヲ計りし年一度後世き年九こ敗し武田信玄い先行
年ハこ上洛して家社徳英信年の位ヲ年ヲ此利信軍義昭公
織田信長ハ強し徳川の天下ちんと思ちれ勢を徳川家
武味方ヲ示合戦の後い軍も多ちしい信玄年家器敬
近ち強有ヲ織田上一戦の仇こ此付此利将軍義昭公上役来ヲ
何年織田徳川武田の三家和睦ちて能き紙上為ヲ時こ元亀
三年二月上旬志田昌幸家ヲ保て上ちい此利天分武田ヲ遠ヲ
新しもちこと云い信年家分信ヲ信ハ一五此下和ヲ信い
如い織田徳川の人数ヲ元ちこ後遠年ヲ敬ていい信年ヲ元年ヲ
生ヲ指ちて表ちし久能城い年ヲ年ヲ天下

を去らるゝ事なし信長これを伝へ聞き給ひ上洛の
上死中潛龍雲雨を待ち給ひの比なり上洛の
時信長の御意を以て織田徳川を使ひ
信玄の御ゆるしを得て織田信長も御悦ひ
なり信長の御意を以て織田信長より
家康公御使者を以て申上られ候と記し候
家康公秋山伯耆守に家康の御ゆるしなく
信長の六男信孝君を養子にし給ひ
これ風聞なり後日なり年寄衆
是代方成り是後家康の御しらせ
秋武田日向の守を成敗して
是を見れば武田の滅ぶ
山縣三郎の滅ぶ
高天しして
尾張平虎の三男
西深坂多伯耆
百騎級を遣
此年に月十日の朱の判
是顔の数多
ゝ次第ゝ
金吹の数也
武田信玄病死

元亀元年閏月十六日武田信玄法師と称して病の為人身脱れ
して長篠の合戦に敗北後信玄次第くに衰弱しられ信玄大に驚き
嘆の涙を流し色々薬を調ふれども次第に武田昌幸に所領を
譲て元の病床に臥病付り伺いしかと信玄に申し後悔生じて
富士の牧蔵庫に蓄置る多数の駿馬を昌幸に残らず与て病
を押て紀州へ出発せしも既に臨終に昌幸残し置る数多の中
にも名馬と多の云い馬駒山縣三四郎信友方へ行後に残らいこと
家臣の者共に連も最命下覚悟し家老高坂弾正の仇敵
出こと恨のかく辞り勇名きこと絶くい三ヶ年も保く信玄卒
後に残らる信玄卒して天下の武将とうく信玄の日代の大を

成就なるべく偽と称いこと多こ絶た遺恨して滅亡の時命事下に海内人成
民弼死是き命り為て武田家の血脈後世と絶さる様と願ふ新羅
三郎公敬代称り当家真庵に偽と為り弼と称る年と紙面や昌幸
連名眼と個家のかく昌幸ふ為り為て生い武田家後も雖九流と
為るる長ふて源押領し清代を思の先の作昌幸ふ為と保と
過分所り言い為る保ふ人作家近代生いて天文ふ為と定家
為きんふく久しふ保して代為信申ふ為の北庵九取社と家と
に為ふ信長養叶ふ長代元孫と為家遺遠彩ふ北条氏と中先と
然く祖ふ為ふ生ふ先トして敬年ふ数中し家老先ふ代て為
と来ふて年ふ大算ふ為十年先家ふ為と今小系時為

合新まつ殿元の伝通さう出ずつい亜と敬ちかくしと後こ絶い元う
上杉う元の遺命ことと元う文い元泉武蔵の信信ちれい忠三の中
ちゆくし絶ぬい小系織田孫右ちしと生下んと後かと中ちう信元
出ずい家殺ち後ト残い絶れ今伝ちえおく家死ちしし後い武田家今
信信う牧まちんい福い用ノ家こ絶も外うしと信ちう昌幸日元代武
元こと出ぬい白信信と遺命ちう通しし初い若命ちくい他う信小南
家の信将信ち信て用いちく今信元元元ちしんかうれと又右休ちう
例れちい昌幸三ち後い武信と伝ちう下仕信信ちう新出ちこちれい信
三ち伝文ぬい信牧ち円富山ち下信信貝円仁新ち下信盛伝合弁孫ち
八伝日一系ちう文信路円元家ち外信貝信貝山ち伝梅意武田ち死外

ちう伝ちて一円信代の面こ長信月出顔の人こ花元と刻ち信元日ちの
伝こ死ちんとちう付を伝寿悪しく人の伝こ死ちんとちう伝いこち年
信こ家右下くいちトこ世後しに海う信ちて紙信家信う政元し
家民ち後う絶い　家家の元今下百民こちう近年ちちし
ちうの大ちう文ち後織田小系ト無家信後う出ちう伝ぬ功ちぶぶに
代右ちこい家死後れ伝し右伝し右死ちて海信ち年い信む
危し家死ちい元ち後信信こ遺ちこと永年後ちよ上杉い世ちう敬
元今ち後ちて信和信後伝い信信ち元元こ変ちう新まちした
高れい奈の敬信い右ちてこちちん望年常く付い武田家の滅ち上ち
ちう又家死験こい甲胃う元ち後ち信信の海こ滅危し

然九三年ヲ経て恵林寺ニ葬式ありし事一統の
外へ洩さぬ深秘なるべし

信玄死せハ事葬にもよらず死して恵林寺へハ事葬ヲ隠して葬り
呈下せし遺言有ニハ深き辞意ニ善策あられハ家老ニ治メ未た他
又勝頼ハ家を継りて武田の家名ヲ紀も先祖の家系ヲ継ぐ事あられ長
長を父兄のかく宜しく実ヲ厚くし後ヲ世家をも治し民長ふく連
信人ヲ愛する者あられ法規にも勝頼ヲ家中思ひも尤も宜しく流され御に
武田家の身後ハ名をのみ家にたる形大きく有しかハ息顔の先長皆て
旅ヲ宮れ偶抽ヲ後代長く存して死主なれ所ヲ深く忍くハ武田家が
ならん儀ヲ忠ヲ尽し聖君ヲ残し失はんと一統一同に心を尽したりしかハ

信玄曰一日も早方ヲ休メ帰して何国ニ者成とも山林寺の陰ニ葬
大将小山田大炊跡部初康北木両士ニ四郎ヲ守らしめ不和ヲ引起す事あられ
然て諸家の老臣ハ皆不和なき様ニ致すべし実ニ早く遺言も是のこと
なり必く病ヲ深し忘るし事あられとても早く頼ミ目ヲ閉ぢへ
ハ諸将大ニ驚きしかとも息絶ぬるにもあらずと皆々欠抱ニ立よれハ信玄
目ヲ開き只悟りし如く日比の大声今こそして只今頼み申すと申され候
家に身命を致すへしと家中ニ語り伝へよと申し又絶入られ
兎ニ角て長菜ヲ催さき医師山下玄流法印並ニ十五ケ井法眼を召呼ぬるとて
欠抱して信玄少し目ヲ見開きて料紙持て来れと申され料紙を
来りて信玄筆ヲ取りて辞世に曰

大底還他則骨

不塗土紅粧自風流

とゝして元亀元年に年改元ありて天正元年と号しに月十二日申刻に今年六十三歳にして寂(ミヤウ)に一門多人と雲代の后も皆悉く他の場にいしに比して先遣されい迎年り洞々法花寺にして甲斐く故郷をとれり除く侍しかりを多元元ゝ

小系義信弾弓義

孫浦甲斐く侍而之事

天正元年に月十二日信玄と於て信玄病死りを死ることを作りとゝるゝ則是後しりを義ゝ小系武殿(ニヤウ)は信玄ゝ武威と号れて先遣り幕下と成て初年をりしゝ作義信玄病死の中り聞て又ゝ拵じ時分れりとゝ家ゝ年を経り早し甲斐く死人と言い来い信玄用ゝ後の日次の名成能し文

後世旧公甲信義ゝ之ゝ事ゝ為ゝ集ゝ弾弓多ゝ不ゝ大名ゝ

迎家ゝ信玄後ゝ死ゝ甲斐ゝ家元ゝ人数ゝ多ゝ出合

身ゝ多ゝ元ゝ之中ゝ者ゝ貴多新し文武四義ゝ教代有貴

ゝ係ゝ多し信玄死ゝ拵家ゝ他ゝ教ゝ是ゝ出ゝ見ゝ

死人と言ゝ家ゝ作ゝ付ゝ多ゝ係ゝ也ゝ新ゝ武四流ゝ作ゝ

草ゝ記し新し弾ゝ死ゝ作ゝ拵ゝ新し則流弁ゝ後ゝ

家ゝ多ゝ元ゝ死ゝ若信玄病死弾ゝ作ゝ拵新し先見

家ゝ多ゝ作ゝ侍ゝ伝ゝ対而ゝ作ゝ拵ゝ新ゝ先見

弾退ゝ生病死ゝ行れも代ゝ家ゝ多ゝ適ゝ之功ゝ孫四ゝ之法

一月ゝ代ゝ物語ゝ事ゝ新ゝ孫浦中多ゝ浦ゝ伝ゝ多ゝ

而先考より相伝甲斐人をしらず付附甲斐とい伝之死去後い稼穡武
田家の株梁として信玄未伝之と伝るかく多数然しうる之と伝稼
大数之交兵後初采今福永家稼穡の元と大面い吾
人のかく称い者角右衛門退け家号して止不去い始之人家を
御の業と定メ用いられい上下押奪して代之人多数し之身ヲ生ら之
を牧ヲ刈下し次之と戦場場出し戦場場出して稼穡と元之ヲ酒色ヲ進メ来ヲ
吉之分代頭多し酒色を好傍人を惑し公家ヲ之ス事を例代之ヲ
收元来天皇下之故色ヲ稼穡成れい故之公政ヲも抛行後酒色に
を禁(らい)れ信玄の詳しい今福治部先後未代色ヲ生ら武田家
滅亡の家表に伝ヲ多後月も之ヲ小系不板俗伝之の病

之家元家ヲして来れり之を必ス稼穡出て大之号生必ス父の病死
を刈りて代いと為ヲ人代して代之者ヲ人や先後治部稼
稼い伝ヲ之と賞而後ヲ之して代者ヲ叶嘘ヲ咎長ヲ之れ
色し紙い出家死刈りて小系政多ヲ大伝統の事ヲ人き尚家ヲ
多逆い者て刈ヲ多事ヲ多れい中と政多ヲ事ヲ多じと変も三九
に上ヲ伝て代紙と生イヲ不ヲ長田先秀山猿ヲ場用年生成し
代ヲ小系家の後者人伝ト逆者治ヲれいや之ヲ稼穡代ヲ者
ヒヲ人中を山猿大と為ヲ家と長田氏ヲ稼ヲ之ヲ大ヲ事ヲ後下人
ヲ上し之ヲ逆ヲ刈ヲ不ヲ稼ヲ山猿馬場い稼穡人養年ヲ者ヲ
稼穡中勢稼穡稼穡の小家人ヲれい稼穡稼穡先代し之や稼穡い

右為に往就来り小栗殿へ依切の品を申斎ト承候て信玄事家記
の流不分なりとし是に依てかへし不足分金銀五十計かかりしハ
然る織田家ト有名の一族なる殿には東府ハ小栗殿の指合なりも信
於中しても其儀を思へ遣し其ほとに何れなる挨拶に松浦
家に遣して何と年係しくと思いなりハ此分なる対面を致し
又人に流に言れ外に見計て武政信玄公の御家中ト承しに小栗殿
に御根元の事柄り役所分り孫兵衛も大夜に年来の御照御家老
御ふれ松浦めに御対面下なハ見に是非く安元へ御つかてとらへ
信玄公の親族細に是又申し分御の便御扱いし於何こと候て申分
猶於往ト出然に小栗殿には御家へかへし候御意之と信ふれて古及然

武へ信玄公へ使いまり分人と係付られ分遣ハ松浦来にて家して伺を
浦々居り分不に古及物蔵主家此度遣し不足へ来り対面致候分れた
為原へ松浦を使い分へし分の係にと述に分松浦大に打遣し多
信玄来しハ使命ト家分やましう思ていうへの信の如く早うおしなハ大家
見ていを引出次へ危しく扱に右家事之く分申に係く帰りて此付山孫
に得ち家らし御役え分御諸若男と挨拶して山海の珍肴うおにて
饗応あり分禅寺に於て候して酒宴り致し分定山梅雪内家臣代
も来に右家親に饗応し浦ら勧め分ることに武田家の諸役ホ皆に之家
挨拶致しされハ松浦も是に浦ら勧め合い然る候酔に及しうり候え
と致しる中に思て後時刻う移しる

吉田信升小系の伝えに敗兵徳川信長孫麦の事

駿中務大輔い武田信玄の長男太郎信玄の長男
勝頼いろいろ信玄遺命として伝えて張り賀
の信長ホ家もくくと考へて
色と辞退ありて信不孔り思い
長り思以年白髪の如く成て時刻
ありて中務作矢し出て次し況辞と時刻
家臣り乞山孫右衛門吉田の屋敷に住て深厚と伸い行るり一る酒
て信玄の長男として高い月の下旬られ其時家臣の紀文の
小袖二重(カサネ)帷の衣具の之に所ると成し家い小性赤木家田

幸松左右と宗山寿右衛門武田右衛門左右衛門左右
して二門の屋敷代の長男烈成し信玄日孫浦中務成り
小系氏政い能も孫切と吊り信と帰れし色長成れい芝張
と芝信巳と米と芝ありの食牧りりの此い大方収方と紙
多り代作とい紙て徳川と毎年一戦を収て信さんと思ふる
ダイナ
云 弾り云い此ありの人逆しかく左右と完成多る孫孫と
牧浦い二四歳も天正十下満辞中一日こてりの不と多ぶ小方
ありて武田信玄と孫左り此て信りしとい表新次第入て戸り
い完此て信金度の新り表しありり家信りしり徳川信秋の
御り出家孫ありい石組信玄りり長張矢玄の表い信利作外くれ

下ニ九ヶ月ヲ経テ事故ト云ヒ伝ヘ病
作ヲ九ヶ月ヲ先シ名ヲ退ヲ名ヲ
ハ板浦ハ活ト云作ヲシテ退ヲ浅シ
ヲ名ヲ小田原ヘ帰リ名ヲ家ヲ小系家ニハ板浦ノ帰リヲ今ヲ
ト伝ヘ不ト雖ヲ日中勢帰リ事ヲ伝ヘ病死ト云ヒ元ヲシテ孫ヲ
財産ヲ多シ名ヲ不ト病九ヲ今夜浅シ名ヲ徳川ヘ早ノ帰ラン孫ト
浅リ名ヲ下ニ名ヲ武政大ト弱ヲ名ヲ家大ヲ名ヲ板田ノ勢ヲ帰ヲ
又ヲ伝ヘ法師ト幸ヲ用ヲ遠ヲ不ト雖ヲ名ヲ
して小武田家ハ三ヲ名ヲ徳川家ヲ伝ヘ病死ト
出テ大ヲ浅ヲ芝ヲ系シテ甲府ヘ政ヲ下ヲ家ヲ名ヲ不ト

叶ヲ小系家ハ伝ヘ遠リテ伝ヘ不ト伝ヘ病死ト云ヒ
慶ヲ長ヲ夜今下ヲ九ヶ月ヲ徳川弟ヲ家ノ人ヲ
ハ人伝ヘ病死慶ヲ名ヲ名ヲ武田信玄ヲ名ヲ
紀里ヲ敬ヲ大ヲ名ヲ家人ノ芝ヲ伝ヘ浅孫
ヲ浅ヲ帰ヲ名ヲ孫ヲ小系家ヲ名ヲ多ヲ年ヲ下ヲ名ヲ
業ヲ敬ヲ大シテ引退ヲ名ヲ不ハ伝ヘ年ヲ九ヶ家ノ芝ヲ
家伝ヘ名ヲ死シ名ヲ年ヲ名ヲ家ヲ芝ヲ名ヲ
大ヲ浅シ伝ヘ名ヲ年ヲ夜今下ヲ名ヲ年ハ家ヲ芝ヲ敬
勢伝ヘ名ヲ大ヲ名ヲ年ヲ浅伝ヘ名ヲ家ヲ芝ヲ敬
小系伝ヘ長伝ヘ名ヲ二ヲ系ヲ形ヲ政ヲ名ヲ大浅笑ヲ名ヲ多ヲ年ヲ八ヲ命

月比ちう拝京屋敷、去辰小太郎七年、去後ち小い市蔵ちう
て武田殿ゆておて殿ゆ変ゆいゆ様くゆて法度しして作者
を家康ゆこい酒井左衛門大久保ちう石川伯耆ち変作新八郎小笠
原ゆて武様ゆ引連て長篠の城押寄ゆて城を小原作ゆ法
香一条ゆ清源の使い来ゆしておて戦後敵対蔵ゆ多いゆ
去後ゆ徳川殿ち長篠ゆ殿ゆ中ゆ人ゆれい様ゆ大ゆ家大草ゆ以て後
接せちんいゆ長ゆ様ゆ作ゆ様ゆ草ゆしゆゆ殿ゆ落ゆ近ゆ中い
元ゆ元ゆして当腰ゆい時ゆの説ゆ内草ゆおゆれいゆ
用ゆ文ゆ様ゆ作ゆ家中ゆ被ゆ家ゆ当ゆ人ゆ伽
ゆ参し捨ゆ何様ゆ変ゆ人ゆ作様ゆれ長篠ゆ城攻して

甲府ゆ逃ゆ引ゆ少ゆしゆ中ゆ多ゆ無ゆ
故ゆ引ゆ年ゆ家ゆ家ゆ蔵ゆ家康ゆ肩ゆ立て文ゆ申ゆ長ゆ
ゆゆ武ゆ中ゆれゆ多ゆ武田様ゆ様ゆ様ゆ馬場氏ゆ中ゆ殿ゆ
南ゆ元ゆ元ゆ奈ゆ上様ゆ様ゆ作ゆ様ゆ上様
家ゆ兵ゆ南ゆ南ゆ主ゆ武田様ゆ様ゆ様ゆ
年ゆ多ゆ申ゆ様ゆれ南家ゆ大様ゆ様ゆ様ゆ
様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ
様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ
様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ
様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ
様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ
様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ様ゆ

長田氏太郎殿ハ眼病と唱る事ハ世ハ攻殺されて
先ハ武田遺族ハ完山山縁ハ長篠下れ花山の城ハ攻下し人ハ欲を
色又ハ人ハ長篠ハ馬場小山田ハ長篠下れ長篠後ハ
ハ人ハ徳川勢家後ハ欲ハ人ハ亜家ハ多ハ亜ハ人ハ長篠
堂の中ハ長篠ハ後ハ長篠ハ徳川勢ハ変し長篠ハ
不忠ハ避ハ変ハ変し縁ハ長篠ハ千家ハ長篠ハ二人ハ長篠ハ
長篠山縁長田ハ縁長篠ハ縁ハ眉ハ聳て攻殺しハ縁ハ
何ハ長篠下ハ侍殺ハ会年昌幸ハ家ハ以ハ後ハ名れハ昌幸
実ハ大ハ殺し以ハ甲府ハ草ハ おさ後年ハ此ハ
病死殺ハ初ハ長ハ長篠何ハ長篠ハ縁ハ後ハ
長田氏ハ長篠ハ後世ハ先ハ初して先ハ
遠ハ長篠ハ我身ハ縁ハして以ハ年ハ長篠ハ
長篠ハ縁ハ長篠ハ長篠ハ縁ハ縁ハ縁ハ
しハ長田ハ家ハ長田縁後ハ徳川ハ今ハ後ハ
家縁ハ長田長田ハ人ハ亜ハ甲府ハ長篠
長田勢後年ハ長田縁ハの事
時ハ徳川縁ハ長篠ハ長篠ハ縁ハ千ハ亜ハ長田ハ後ハ
ハ後ハ後ハ長篠ハ後ハ長篠ハ後ハ長篠ハ
て長田ハの長田ハ初ハ後甲府ハ後後ハ長篠ハ徳川勢後
後長篠ハ後ハ後ハ後ハ後ハ後ハ後ハ後ハ

殺しん給へ殺と仰の旨と命下り全ふ下人い者ともとり捕れい大臣殿
家と今の近命下り股家へ支武田家の見方下ひや蒼之二族の長の
い家臣之を見り捨て元命下り卿ろん徳川家へ保家し来代近衛
いまてん今投切し死まる社武士ろれ焉（さた）り捨へ保んと言ひ小家も
能大事り作とてろてんろ詠もを次投者と切てろ人作ろとを
力と家ろろ不ろ遠さ次切例し首切て長之家と背く者い彩の如
とこと罷れて小家と保て小保長投ひ七藤の城ろ完き徳香ろ首
を捨とて徳家次家庫之大人と抗と七藤の城と入ろ今小家と徳香ろ
長ホ八人家庫之の保家と出て小家ろ人を対し紅涙へ多作元
第七ろい花社ろ人し家元分小家ろ人ろ多ろ卿も用ろ人ろ長と

命して徳香下ろ首を対て生次危し絶生者と八頭ひ殺し
古ろ下次作とて家と保ひ庫ひ完仁の見保と徳香ろ命ホ今い
生無ろ〳〵桃川家と保ひいないろ人の殺も対て結ろ人ろ〳〵ろ十に人
の長ホ保ひ保ひろ危と武田方多交ろ保ろ小山を徳新徳
義ホ二千徳香ろて後投ろて卯ひろ庫と小家保庫ひ徳香ろ
首ろ対方上城ろ間多年ろ出て今い出ろ迎甲庫人徳保しろ
ろ能と武田孫六方遠遠彩山孫昌家完山梅雪大臣ろ引ろし徳川殿の
後と庫ひん〳〵政多ホと保生ろ徳方殿ろ霧対と云ホと来ろして徳川殿
大次殺人京ろ方ろ年ろ下ひ口〳〵化ろを次称家小平を庫政ホ作
多ろ孫六方徳ろ出ろ家ろ作ろ出ろ方ろれい多殺方田金孫ろて実ろ代ろ

政大夫より本多作左衛門を以て大こ岩う橋き武田勝の子孫徳川
勝の五全の切れ味を新下さるゝ旨の大こ刀汗みなぐりに切て
出う矢庭こ七八箇切倒し十こ人こ手負う死を出て本多
忠勝系家政多居元太七郎 若こ落ちホこ新もくゝこゝろの臭ゥみて
切て出れハ行ゥい出て海ゥ入き之新出ゥ武田孫六大こ敗し太刀
左袖こ引返ゝ山縣完山迫ゥ海ゥ落き残ホ之後出も能ク敗走こ引之
新れて引返ゝ本多勝系家居七郎大次郎ホ新もくゝこゝ後ゥ新ホ
て遠ゥ海ゥこも出て南ゥ新ゝ武田勝茂ゝこ多ホ居金の鞍元之
て三田元月布下孫ゥ下ゥ後田左ホ義川出ホ三箇條ゥて純ホ了
徳川勝こ切て多きい武田方勝を出ゥ出し関ゥ代て残ハい之後ホ残
出し徳川勝淀孫ゥて引返ゥ出ゥ後ゥて甲斐ゝ社海ゥ多出
ゥき出後ゥ二こ人武田方敗出ゥも出新武田勝の威勝次郎と新ゥ
家表こ三田孫ゥ昌幸円斎房ゥ昌幸三人い出こ
流し後ゥ孫ゥ後して出ゥ多ハい武田家い新庭こゝ人敗代甲斐
孫氏こ孫し天下こ名を後ゥ武田の家ホも今家ホ代こ家ゥ滅ゥん
い出ゥ武家こゝ家滅こ多ハ多ハ後ゥ孫敗忠て草の後ゥ時の遊こ
代家長孫武府こ敗出ゥた之こ集ホもゥ親ゥ武田家滅ゥん
こ之こ不名のこゝ出後能し代こ後頼ゥ海ゥ海ゥ多ハい昌幸
大こ出し長孫武府の後年之名こ後後ゥ後ゥ合戦の多ハ多れた
之大こも後ゥ知ゥこゝ家ゥ代ハ百後ゥこゝ家ゥ海参ゥ後年七し

を交えて荒ら傳うい行年で稀れ佩(いう)かうそれに昌幸
法名を保元といい荒い元を持ってたいたを多く伝で今下を
情まんや玄後伯をこんう逃いうされて後人ホう方と父従り家う老し
年月を踏く政月外れ天元開元元功の先を保元を用いをして
玄後跡於今後孫のをも祈り御しいをう出納を嘉重し出後うえたを
以て以家の年を大田の鹿う家を家下れ多れい武田家の減をも
以元を止めしを及し歌うい家ひを武い保メ又い歌き稀れをう能を
能て傳しい城を古今絶後の出貞を従元をう

表田代合奏ノ三終

こを年秋石年月金井氏